S. Ashina

＜キリスト教思想史――古代から中世・宗教改革＞

０．オリエンテーション――宗教と文化　　１．キリスト教の成立と初期キリスト教
２．キリスト教教父１――使徒教父、弁証家　　３．キリスト教の国教化
４．三位一体論の形成過程とその意義　　５．研究発表１
６．修道制の展開　　７．キリスト教教父２――アウグスティヌス
８．中世キリスト教世界のダイナミズム　９．キリストと文化――スコラ的文化総合
10. 研究発表２　11. 自然神学と歴史神学　12. イスラームと１２世紀ルネサンス
13. 宗教改革と近代世界（「キリスト教学研究室にて」） 1/21

＜前回＞自然神学と歴史神学

Ａ．自然神学・構造

自然神学(natural theology)は、啓示神学(revealed theology)と対をなす、キリスト教思想の伝統的なテーマである。一般に、啓示神学が神の啓示の書物である「聖書」を通した神認識であるのに対して、自然神学は神の被造物（作品）としての「自然」を通した、あるいは人間の自然の理性的能力による神認識と説明される。聖書と自然を神認識のための書物とする「二つの書物」説はその典型であり、また宇宙論的な神の存在論証は、自然神学の代表的な議論と言える。こうした意味における自然神学については、ローマ・カトリック教会とプロテスタント教会との対立を歴史的背景として、とくに、プロテスタント的立場のキリスト教思想家によってしばしば否定的な評価がなされてきた。聖書的啓示なしに神が認識可能であるというのは、異端的また異教的、非難すべき中世カトリック教会的な遺物であるとの見解である。たとえば、1930 年代の有名なバルト(Karl Barth)とブルンナーの「自然神学論争」は、プロテスタントにおける反自然神学的立場を印象づけるものとなった。しかし、こうした状況は、最近の自然神学をめぐる研究の進展に伴い、大きな修正をせまられている。

Ｂ．歴史神学・プロセス

フィオーレのヨアキム(Joachim of Fiore)　1130 頃-1202

イタリアの神学者、神秘思想家。南イタリアのカラブリア地方のフィオーレに修道院を開く。独特の三位一体論に基づいた歴史神学を展開し、フランシスコ会を始め、中世以降の千年王国論に大きな影響を与えた。

ヨアキムの聖書解釈は、古代から中世にかけて展開された聖書解釈学、とくに聖書テキストの霊的解釈の伝統に依拠している。２世紀後半までには字義的意味、寓意的意味、道徳的（比喩的）意味、神秘的（上昇的）意味という聖書テキストの四重の意味論が成立していたが、ヨアキムは聖書の霊的意味をめぐる複雑な理論を展開し、字義的意味、予型的意味、観想的意味という３つの意味から、調和(concordia)と寓意(allegoria)の区別に基づく15の意味に至るまで、意味の諸階層を詳細に論じている。注目すべきは、この聖書解釈が、神論そして歴史神学と緊密に結びつけられている点である。神が自らを歴史的に啓示し歴史過程を導く存在であるならば、それは現実の歴史過程に何らかの仕方で反映しているはずである（神と歴史の同型性）。もちろん、歴史の出来事自体が神の歴史支配を明示しているわけではないが、聖書は神と歴史の相関関係の証言として解釈できる。ヨアキムにとって、聖書の霊的解釈とはまさにこうした機能を果たしていたのであり、それは、神の三一性に基づいて歴史過程を三一的に構築する歴史神学を帰結することになる。こうして、歴史過程全体は、父の時代、子の時代、聖霊の時代という三つの時代の継起として解釈された。しかも、この三つの時代の継起は、三位一体の三つの位格が相互内在していることに対応して、有機的な相互に重なり合った内的連関を有している――ティリッヒ(1886-1965)はこれを弁証法的な関係と解釈している（ヘーゲルやマルクスの歴史哲学の原型）――。先行する時代の中には続く時代がすでに萌芽として始まっており、先行する時代は続く時代の中に持続的に作用している。たとえば、父の時代の第三区分（ウジア王からキリスト誕生）は、同時に子の時代の第一区分（萌芽期）

を意味する。とくに、ヨアキム以降の黙示的終末論にとって問題になるのは、第三の聖霊の時代――これは、修道生活の発展の中で開始され、ヨアキムの時代は聖霊の力が明瞭な仕方で発揮される開花期に入ろうとしている――である。三つの時代が、イスラエル民族、教会、修道院に対応することを考えれば、この歴史神学は解釈しだいでは、教会にとってきわめて危険な思想となり得ることがわかる。なぜなら、この歴史神学は、教会と国家に基盤をもつ既存の世界秩序が聖霊の時代（高次の秩序）によって歴史的に乗り越えられることを含意するからである。

この歴史神学の革命的な意義は、アウグスティヌス(354-430)の歴史神学と対比するとき、より鮮明になる。アウグスティヌスによれば、歴史的現実は、教会も含めて、神の国と地の国という二大原理によって規定された混合体であるが、千年王国は教会的秩序の中にすでに存在しており、この歴史的現実は歴史の内部では乗り越えられることはない、つまり、教会と国家の既存の秩序は終末まで存続するとされていた（保守的)。しかし、ヨアキムは、この既存の秩序が歴史の内部で次の秩序に移行することを示唆する。ヨアキムの歴史神学は、既存の秩序の批判と新しい来るべき秩序へのヴィジョンを伴う点で、西欧の革命思想の原型となり、影響は、13世紀のフランシスコ会の急進派から近代にまで及んでいる。

12．イスラームと１２世紀ルネサンス

（1）中世は暗黒時代ではない

１．中世社会の変動と新しい宗教性の展開

・農業革命　→　都市の発展、都市のネットワーク

・都市民衆の宗教性　→　市民層の形成と devotio moderna

・異端的民衆運動と教会の対応

　十字軍（アルビジョア十字軍）

　新しい修道院運動（ドミニコ会、フランシスコ会）

　異端審問制度

２．大学の時代、中世科学の進展。

外的要因としてのイスラーム

　中世キリスト教世界のダイナミズムは、中世の外部としてのイスラームとの相互関係なしには、理解できない。

断続的に繰り返されるルネサンス（イタリア･ルネサンスはその最後の波）

（2）イスラームとキリスト教世界

313:キリスト教の公認
375:ゲルマン移動開始
395:東西ローマ帝国の分裂
476:西ローマ帝国の滅亡
529:アカデメイアの閉鎖、モンテ・カシーノ修道院の創設
622:ヘジラ元年（ムハンマド、メッカからメディナへ）
661:ウマイヤ朝
732:トゥールの戦い（カール大帝、サラセンを破る）
750:アッバース朝
962:神聖ローマ帝国の建設
969:ファーティマ朝
1037:セルジュク・トルコ
1096:十字軍の開始
1170:パリ大学創設
1204:第 4 回十字軍

1251:グラナダを残し、レコンキスタの完了
1258:アッバース朝滅亡

ウマイヤ朝のイベリア半島征服（アッバース朝に滅ぼされたウマイヤ王朝の王族がスペインに逃れる。アンダルシア王国。アンダルス：ムスリムの統治領域）
コルドバ：711 征服、755 アブド・アッラフマーン到着、756 統治宣言
トレード：712
バルセロナ：713
３．自然学、古代ギリシャからキリスト教世界へ
古代ギリシャの自然学（古代科学）→東ローマ帝国→ペルシャ帝国→イスラーム世界→中世ヨーロッパ世界（イベリア半島など。平和的共存と軍事的接触）
12 世紀ルネサンス、13 世紀中世科学・スコラ：修道院から大学へ
キリスト教的古代から中世までの全体において、文化は東から西に伝播している。
４．十字軍における軍事的接触とは別の経路・別の交流
イベリア半島における三宗教共存（寛容の文化）の一つの可能性
哲学（アリストテレス）、科学（自然学）、建築、文学（11 世紀のイスラームにおける愛の伝統が、トゥルバドゥールの発生を刺激した。ロマンティック・ラブの成立（伊東、1993、227-270））の相互交流。
レコンキスタによって平和的共存は終焉　→　強制改宗か追放かの時代へ。
マラノか亡命か
５．「アンダルスは七〇〇年以上、アメリカ合衆国のざっと三倍にもおよぶ期間にわたってヨーロッパにイスラームが存在したことの、まごうことなき印である」（メルカル、6）
「ヨーロッパ最後のイスラーム都市国家グラナダは、一四九二年に征服され、「モーロ人」はユダヤ人とともにスペインから追放されることになった」（7）
「相反するものの集合体という意味での文化の核心はまさに、アンダルスに存していた。だから、わたしたちは中心に地中海をおいてヨーロッパの地図を再構築し、アンダルスのまなざしを介してわたしたち自身の物語を語りはじめなくてはならない。深くアラブ化したユダヤ人がヘブライ語を再発見、いや、ふたたび創案したのはまさしくアンダルスにおいてであった。イスラームの統治下で生活するキリスト教徒ばかりか、イベリア半島における政治的支配を奪還したキリスト教徒までもが、哲学などの知の様式からモスクの建築様式にいたるまで、アラブ的様式のあらゆる面を受容したのもまさにそこであった。アベラールやマイモニデスやアヴェロエスのように、揺るぎない信念の徒が、それぞれの信仰を横断して、哲学的、科学的、宗教的事実を追い求めるなかで、いかなる矛盾にも出会わなかったのもやはりそこであった」（8）
「コルドバの図書館は、学芸にかぎらず、社会全体の栄光を雄弁にものがたる重要な指標である。それはまさに、物質的な富と知的な財産とがちょうど交差する十字路のようなものだからである」（32）
「共存という社会実験」「征服後の社会では、キリスト教徒が主体となってムスリムとの共存という社会実験が行われることになったのであり、これはヨーロッパ史上初めての試みであった。」（小澤、271）
６．ヨーロッパを移動する人々による知と文化の交流・伝達
聖地巡礼、移動する労働者（ギルド・職人、商人）、外交交渉、学生・説教者、マイノリティー（女性、ロマ、ユダヤ人）、
・コペルニクス（1473-1543）の場合：ポーランド王国のワーミア司教区（現在の北部ホーランド）のフロムボルク聖堂参事会員（聖職禄をもつ教会行政官）。イタリアに留学に、医学と教会法を学ぶ。イタリア留学中に天文学に関心を持つ。独自に考えた天文学の概要を『コメンタリウム』（ニコラス・コペルニクスの小論。コペルニクス『天体回転論』みすず書房、に所収）という題の小論文として書き上げる。さらに、1530 年頃に『天

体回転論』を書き上げ、人目につかないようにしまい込み、修正を加える。コペルニクスの『天体回転論』の出版を勧めたのは、ルター派のプロテスタントのレティクス（コペルニクスの弟子になる）であり、レティクスは印刷の監督をオジアンダーに依頼。オジアンダーは無署名の序文を付けて印刷完成。出版は 1573 年で、コペルニクスの臨終の床に届けられた。死後 73 年が経過した 1616 年に（16 世紀後半を通じて、カトリックとプロテスタントの双方で広く読まれ、しばしば研究された)、「訂正されるまで」読んではならないとの指示とともにカトリック禁書目録に載せられた。1835 年にガリレオの著書ともに禁書目録からはずされる。

（３）中世科学と 12 世紀ルネサンス

７．イスラーム科学：8 世紀のアッバース革命、この王朝の下でのイスラーム科学（8 世紀から 15 世紀）の黄金時代（8 世紀から 11 世紀は西欧科学を圧倒、12 世紀からラテン世界へ流入)、アラビア語による科学。イラン人、トルコ人、ユダヤ人など。

８．12 世紀ルネサンスの開始：大翻訳運動、アラビア語からラテン語へ

「十二世紀ルネサンスの知的回復運動の中心となったところはどこかと言えば、それは一貫してスペインとイタリアであった」「北東スペイン学派」「トレード学派」「日田イタリア学派」（伊東、1978、220）

「北東スペイン学派」「カタロニア」「ピレネー山脈かエブロ河に至る」

「近代西欧科学の知的源泉をたどるならばほとんど、この中世ルネサンスの知的所産にゆきつく」（233）

「こうした「一二世紀ルネサンス」の結節点となったのが、イスラーム世界との接点の多いシチリアとスペインであった。シチリアとスペインの翻訳活動を通じ、西ヨーロッパにアリストテレス哲学、や新プラトン主義、自然科学の様々な知、イスラーム世界の知的伝統が紹介され、「一二世紀ルネサンス」と呼ばれる西ヨーロッパ世界の知的復興運動が生じたのである。」（関、151-152)、『イスラーム哲学とキリスト教中世』全三巻、岩波書店。

↓

13 世紀以降の西欧中世の科学的発展

９．「数学的合理性」＋「実験的実証性」→　近代科学

14 世紀の運動論の二つの流れ：ガリレオの先取者たち

オックスフォード学派：ブラドワーディン、運動論の数学的・計算的問題

パリ学派：オレム、ビュリダン、運動そのものの基礎原理の解明＝インペトゥス理論の展開

＜参考文献＞

１．クラウス・リーゼンフーバー『中世思想史』平凡社ライブラリー。

２．小澤実他『辺境のダイナミズム』（ヨーロッパの中世３）岩波書店。

３．関哲行『旅する人びと』（ヨーロッパの中世４）岩波書店。

４．マリア・ロサ・メノカル『寛容の文化――ムスリム、ユダヤ人、キリスト教徒の中世スペイン』名古屋大学出版会。

５．伊東俊太郎『近代科学の源流』中央公論社、1978年。

『十二世紀ルネサンス――西欧世界へのアラビア文明の影響』岩波セミナーブックス、1993年。

６．Ｃ・Ｓ・ルーイス『愛とアレゴリー――ヨーロッパ中世文学の伝統』筑摩書房。

７．上尾信也『歴史としての音――ヨーロッパ中近世の音のコスモロジー』柏書房。

８．コペルニクス『天体回転論』みすず書房。

９．Ｏ・ギンガリッジ、Ｊ・マクラクラン『コペルニクス――地球を動かし天空の美しい秩序へ』大月書店。

10．Ｒ・ホーイカース『最初のコペルニクス体系擁護論』すぐ書房。